栞集を読む

松岡　隆子

川下に流れつくもの初昔　　平沢千恵子

〈初昔〉という季語によって〈川下に流れつくもの〉が大きな意味を成す。流れつく〈もの〉とは何だろう。落葉や菜屑など目に見えるものではなく、形のない何か漠然としたものように思える。流れゆく川をじっと見ているうちに、平沢さんの目には過ぎ去った日々の諸々のものが川上から流れてくるのが見えたのだろう。それはなお先へ流れてゆくのではなく、自分の目の前に流れ着いたのである。〈初昔〉とは新年になってから改めて旧年をふりかえることである。〈初昔〉という季語の働きを充分心得て詠み込んでいる。

朗らかな人から順に日脚伸ぶ　　梶浦　道成

日溜まりのベンチに座って楽しそうに談笑している人たち、賑やかに喋りながら通り過ぎてゆく少女たち。もう日脚はすっかり伸びて、冬暖かい公園のそこここには春の気配が漂っている。朗らかな人の明るさが春を呼ぶのかもしれない。日脚は朗らかな人から順番に伸びるという発想は実に独創的で新鮮だ。「日脚伸ぶ」という季語が新しい視座で詠まれている。

たはたはと汐満つ気配日脚伸ぶ　　中谷　信子

街角のあの辺りはいつもならもう暗くなり始めるのに今日はまだ明るい。自分の周辺の空気のやわらかさ。まるで静かに汐が差してくるように拡がる日差し、五感を解き放って捉えた〈日脚伸ぶ〉である。〈たはたは〉というオノマトペが季節の微妙な移ろいの中に身を委ねている作者を包み込んでいる。遠くから汐の匂いも漂ってくるようだ。

黙すとふ想ひの形冬泉　　菊池　京子

冬枯れの中で滾々と湧く冬泉の清冽な蒼さは孤高の蒼さであり、もの思う蒼さだ。尽きることのない水の命を思い、蕭条と枯れゆくものの命を思う。通り過ぎていった誰彼の命を想うとき、その蒼さは鎮魂の蒼さとなる。

闇よりも沖の暗くて鰤起し　　山口　一女

「鰤起し」とは鰤漁が始まる12月から1月頃に鳴る雷のことである。北陸地方では「雪起し」と共に生活に密着した言葉である。鰤起しは豊漁の前兆とし喜ばれると言うが、海中の鰤を起こすほどの雷の轟を想像すると恐ろしい。冬の夜の日本海は途方もなく暗い。上五中七の表現に凍えるような沖の漆黒の量感が迫ってくる。実感で摑んだ句は迫力がある。